

幼  
児  
の  
造  
形  
林  
健  
造



(幼稚園に入った日・満5才・材料マジックインキと水色のぐ)

I 窓を開けよう

幼児の絵や製作についての問題は、最近とみに活ばつになってきました。それは、今までのように、絵や製作がたんに手技の巧みだけの問題ではなく、もっともっと奥深い幼児の精神や、性格などの人間の心の問題と深いつながりがあるものだということの発見によるからであります。

したがって、幼稚園や保育所の実際の場に立って、幼児の絵や製作とはどんなものかという理解や、その正しい育て方はどうあるべきかがいろいろ問題になってくることと思います。これから、二、三、四月号と連続して、このような問題について、読者の皆様と研究しあっていきたいと思いますが、さて、この講座をあまり肩のこらさない、しかも皆様のお役に立つこ

とができるようにするために、理論的な話は「話の窓」で、また、実際の保育に役立てていただくための技法や試みは、「実技の窓」というように二つの窓に分けて述べていきたいと思えます。

なお、幼児の造形について、皆様からの御相談や御意見でもいだけましたら、そのためにはまた「相談の窓」を設けようではありませんか。

「窓を開けよう」

何という清々しい、明るい言葉でしょう。窓から流れこむ新鮮な空気と、温かい陽ざしとは、鬱気や濁った気分を一掃してくれることでしょう。

話の窓

II すばらしいニュース

一九五一年、英国のプリストルで開かれた美術教育に関する国際的な研究会で、日本の子どもの絵を各国の代表的な人々に批判してもらいました。これはいわば、戦後始めて日本の児童画が、世界の水準と比べてどのような地位にあるか

を知る貴重な機会でありました。ところが、そこでの大多数の国々からうけた批評は、案に相違して、あるいは、案の定、「日本の子どもの絵には創造性が欠けている」という言葉でした。それから我が国では、「創造性をのばすためには」とか「創造主義美術教育」とか、いろいろ創造性について盛んに研究されてきましたし、現に、やはり、最も大きな問題の一つとして叫ばれつつあります。

ところで、それから丁度四年目の今年の八月、南スウェーデンの古い都ルンで国際美術教育会議が開かれ、その模様をスウェーデンの日刊紙が伝えていますが、とくに、各国の児童画展について述べている中で、

「日本の子どもの絵は、生気発刺とした感じと、色彩の豊富さによって、全参加者から、多大の賞讃をうけた。」  
ことを報じています。

このことは、皆様とともに、殊に日本の子どもたちのために大いに喜んでいいことであり、一応日本の子どもの絵が国際水準では高い方であることの自覚

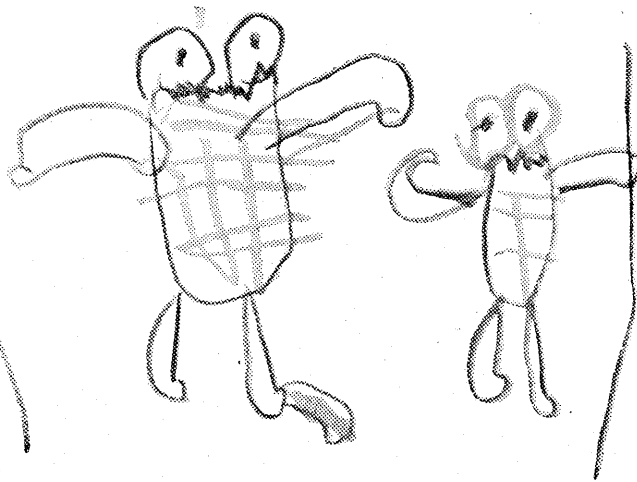
と、やればできるといふ自信を深めるよい機会をえたものと思います。

ちなみに、あらゆる国の出品のうち、最も困苦しい、自由さも、色の喜びも感じられなかったのはフランスの作品で、また、鉄のカーテンの内側からきた絵には一種の萎縮が感ぜられたということや、子どもが自由な状態で描かれた場合、内容の傾向は大體にているがそれでも国々の特色、例えば、セイロンの子どもは象狩り、アメリカの子どもは映画女優のような長いまつげを、英国の子どもは工場の煙を描いているということなども伝えております。(UAL = ニュース十一号)

### Ⅲ 造形活動という名前

今度は国内のニュースです。全国図画工作教育大会は、美術教育に関する我国で最も大きな会合で、毎年各地方順々に行っていますが、今年第八回で東京で開催されました。いろいろの問題について研究討議し

た中「昨年の仙台大会の時に、幼稚園の保育内容中の絵画・製作を造形活動に改めるよう、文部省に御願いしたが、今年はお改められない。ただ絵画と製作の



(かえるさん・満五才)

間の点(・)がとれたのは、絵画と製作の一体性を重視したものとと思う。」という報告がありました。

なぜこのようなことが問題になるかというと、小・中学校の図画や工作よりも絵画・製作は難かしい言葉で、専門的な芸術の分類用語である。ということだけではないのです。

幼児の絵は絵画ではなく、むしろ言葉である。といった方が適切かもしれませんし、絵画が作品主義で結果に重みがかかることに比べて、幼児の絵の場合は、遊びとしての過程に重点があります。絵画という名詞的な言葉に対して、製作は絵をかく活動をも含めた動詞的な言葉であることなども問題でしょう。それから、絵画と製作というように、かく然と分けることのできないのが幼児の活動の特色であるということも言えます。ようするに、絵や工作や、デザインのベース(基盤)になるとみられるような混然とした活動なのです。この意味で、以上を総括した名前として新たに造形活動という言葉が適当であるとされて、ここにとりあげ

られてきた訳であり。

いづれにしても、こんなややこしい名前や、内外のニュースなどの紹介に大部分時間をとって恐縮ですが、ここが今日、最も新しい問題の一角であり、しかもその中には、従来の指導のしかたと新しい方法の違いや幼児の絵や製作の正しい意義や、その中心となるねらいなどのこれから以後にお話しようと思う重要な事柄を孕んでいると思うからであります。したがって私もまた次後、幼児の絵画製作を造形という言葉で述べていきたいと思えます。

#### IV 幼児の造形のいみ

子どもたちの元氣な遊びをみていると、よくもまあこうも次から次と考えると、くものだと思われ程に自分たちの遊びをいろいろ創造していきます。

かって大人の私たちが、そして私たちの祖先がそうしたように。

子どもこのような姿は、洋の古今東西を通して変らない姿でありましょう。ただ、この変らない子ども姿に対し

て、その見方や解釈の仕方は大変な変り方をしました。それには、十九世紀末頃から盛んになった児童美術についての研究が大きな役割を果たしたことも事実です。

従来は、子どもの作ったり、描いたりしたものは、稚拙で、無価値で、なんの意義もないものであると思われていましたし、大体、子どものいろいろな造形表現は、たんなるいたすらとみられ、着物を汚すことを叱ることはあっても、この叱ることによって、子どもの大事な、造形の芽や、物を創りだそうとする創造のふたばを摘みとることになるなどとは考えもみませんでした。

子どもは体が小さいから小さい紙にかくのが適当とされ、また、えのぐなども高学年でないと使うものではないと思われておりました。

「キントト・マンマヨ。」などのかたこと、はとでもかわいいと思った親でも、絵になると、「この子はお馬鹿さんね。こんな頭でっかちで、お家より大きい子なんてある？」ということになります。そして

その年令の頃自分がこの子と同じような絵を描いていたことを忘れて、現在の大人の知っている技法や見方で、いわゆる型にはまった概念的な絵を教えこむことが多いようです。

ピカソは美しい言葉で、このことについて教えてくれています。

人は小鳥を理解することなく愛している。絵になるとなげます理解しようとするのだろう。

たしかに子どもの絵は、ものの形も色も、大きさの釣合も不自然で、レントゲンのように透けてみえたり、逆立ちしていたりしていますが、これは日本の子供に限ったことでなく、世界の子どもも、この年令では同じような絵をかきますが、これは子どもたちにとっては、きわめて自然な描き方であって、大人と子ども心理的な違い、とくにリユケがいつているように、大人は見たままをかく(視的リアリズム) に対して、子どもは知っていることをかく(知的リアリズム) のであることなどが解明されることによって、ようやく子どもの造形表現

について理解するようになりました。

また、幼児の自発活動や、創造性は、主として、表現活動を通して伸ばされるものでありますが、幼児の旺盛な表現欲は、言語や文章などのような抵抗の多い表現形式よりも、もっと具体的な、そして直接的な造形的表現となつてあらわれやすく、逆に言えば、絵を描いたり、ものを作ったりする活動を通して、幼児の自発活動や、創造性を逞ましく伸ばしてやることができるということになります。

したがって幼児の造形とは、その心の表現です。今、幼児の造形について端的にいうならば

子どもが自己の心理的生活を表現するための視覚的手段である。とも、

幼児の造形は、生活記録である。ともまた、コックレル教授の名句

絵は子どもの心をのぞく眼鏡である。ともいえます。

このように、幼児の絵や工作には、子どもの心、とくにその無意識も、最も卒直に表われるために、後述するように、

幼児の造形が、最近幼児の精神衛生や治療に大きな役割を果すことにもなるのであります。

### 実技の窓

#### ◎水えのぐの指導

現在、進歩的な国々の美術教育では、幼児の時代から水えのぐによって描かしている所が多いようです。

その要領は新聞紙二つ折大の大きな紙に、不透明な水えのぐで、丁度らく描きながら描かせることです。

まず、水えのぐの前に、毛筆を使う機会を与えるために、墨汁を茶碗などに出してやり、習字用の太い筆(できれば、穂先をちょっと切っておくか、紙やすりですっておくとよい)で新聞紙や包装紙などの上に線描の絵をかかせます。教師は墨のふくませ方や、墨の乾き方を側面から注意してやります。

えのぐの場合もそうですが、一番困難な点は、筆にふくませる墨(えのぐ)の

分量が多すぎても、少なすぎても困ります。

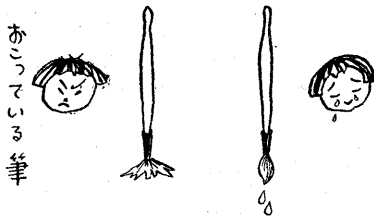
そこでその分量について、幼児にも解り易く説明するために次のように指導するとよいでしょう。(図A)

○分量が多すぎてしずくが滴る時………

(筆さんが泣いてるよ)

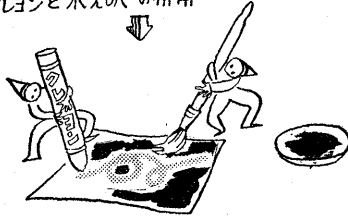
○分量が少なすぎて穂先がばさついてい

ない泣いてる筆



(A)

クレヨンと水えのぐの併用



(B)

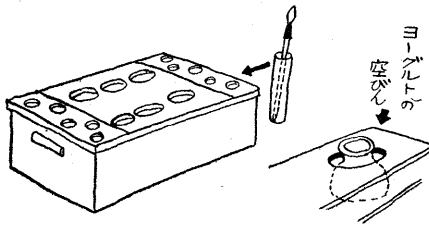
る時……(筆さんがおこっているよ)

次にパスやクレヨンで形をかかせて、

その上から水えのぐを塗らせるのも初歩的な段階ではよく使われる方法です。(図B)

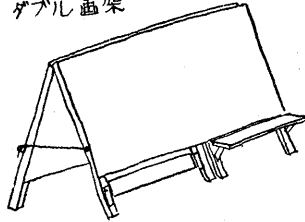
クレヨンやパスには、うしろ分があるので

その部分だけ水をはじいて輪廓がぼやけないので子どもは喜びます。クレヨン



(C)

ダブル画架



(D)

のかわりに、マジックインキでかいて、水えのぐで着色するのもこれと同じ理由で、よい効果をあげます。

ふつう、水えのぐは、のりの顔料が混入されている粉末絵具<sup>パウダークラカラー</sup>やポスターカラーが便利です。安くあげるためには、泥絵具<sup>ドロ絵具</sup>がよいのですがこれは別に膠液を作る不向きがあります。

水えのぐのための用具は、ニーム皿(5寸6)に一色づつといて、筆は一色につき数本用意します。赤に使う筆を青に入れたりしないことを約束し、服装も作業衣・袖カバー、あるいは袖をまくりあげてからかかります。えのぐと筆のために図のような共同の箱を用意し、ヨーグルトの空びんなどを活用することもよいことです。(図C)

床に新聞紙などを敷いて、その上でかかせてもよいが、(図D)のようなダブル画架を作り、両側から、らくがきをできるように立って描かせると腕が自由に

のびて染にかけます。

ようは、先生がおっくうがらずに、むずかしいのではないかなどと思うまえにとにかくやらせてみることで、子どもたちは大よろこびで夢中になって描くものだということがわかるでしょうし、クレヨンなどの絵ではみられない生き生きとした絵にまず驚ろかれるでしょう。このような描画環境を充分に整えてやることこそ実は幼児指導の要点であります。

### ◎クレヨン・パス・色鉛筆などのえ

幼児の絵で最も多く使われている材料はクレヨンです。クレヨンはパスや色鉛筆などと同じく、えのぐが塗るペインティングに對して、描くドローイングの仕事に適した材料です。

幼児の描画は、初期の段階では線描きが主ですから、自由な色で、線を縦横に駆使できるクレヨンが最適で、これは世界中の子どもが使っている材料です。

我國のクレヨンの種類もいろいろあって、選択がむずかしい程ですが、日本工業規格合格品(JISマーク)が①がついているのであれば、一応安心して使えらると思えます。

次にパスはクレヨンより軟かく、重色もよくきくので、ぬるためには適していません。

おそらくパスは日本だけの材料でしょう。

パスは軽くなでただけでは美しい色がないが、それだからといって画面の隅々まで塗らせるというような教え方は希ましくありません。

外国の作品には、色鉛筆で描いた絵が多くみられます。細い線の中に、子ども独自の世界が、実に誠実に表現され、水えのぐのえとは対象的で、幼児の絵が、非常に粗雑になったり、又、新しい刺戟を与える材料としても、時折このような色鉛筆を使用させることはのぞましいことです。(お茶の水女子大学講師)

### 倉橋記念文庫について

幼児教育の父、倉橋惣三先生を永く記念するため幼児教育に関する図書を集めて倉橋文庫とし、お茶の水女子大学図書館に寄贈して末永く先生の御業績を偲びたいと存じます。左記の要項により多くの方が賛同御拠金下さいますようお願い致します。  
なお、御拠金下さいました方々の御芳名は「幼児の教育」誌上に掲載して御厚意を謝し、受領証にかえさせていただきます。

記

拠金 額 一口百円以上

期 日 昭和三十一年二月末日

送金先 東京都文京区大塚町三五  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

倉橋記念文庫係